慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ニコライ・ウストリャーロフと「道標転換」運動 |
| Sub Title | Nikolai Ustrialov and the "Changing Signposts" Movement |
| Author | 廣岡, 正久(Hirooka, Masahisa) |
| Publisher | 慶應義塾大学法学研究会 |
| Publication year | 2003 |
| Jtitle | 法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.76, No.12 (2003. 12) ,p.111- 132 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 鷲見誠一教授退職記念号 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20031228-0111 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ニコライ・ウストリャーロフと「道標転換」運動

廣岡正久

はじめに
一、ニコライ・ウストリャーロフ
二、知識人と革命
三、「道標転換」運動
四、ソヴィエト国家との和解
むすび

## はじめに

クーデタによって誕生したボリシェヴィキ政権は、一九二〇年に入って体制の命運を賭けた内戦が終息し、一先ずは存亡の危機が回避されるとともに、革命の破壊の段階から建設の段階へと移行し始めた。そうした中で、ロシア共産党指導部の間で「ナショナル・ボリシェヴィズム」の思想と運動が一定の影響力をもつこととなった。ところで、そもそもこの言葉は、コミンテルン指導者であったカール・ラデック（一八八五―一九三九）が、

ドイツ共産主義の一分派の主張に命名したものである。一九二〇年一月、ラデックはロシア共産党政治局に対するドイツの「左翼共産主義者」の提案として、「ドイツ労働者がヴェルサイユ条約否認のために一時ドイツ国粋派、資本家と同盟し、また国際的には赤軍の協力を得て連合国と戦うという〈ナショナル・ボリシェヴィズム（National bolschewismus）〉の思想」について報告した。(1)

これに対してナショナリズムの危険性に気づいたレーニンは、『共産主義の左翼小児病』においてこの思想を厳しく断罪した。ロシア革命の国際的使命を確信していた当時のレーニンにとって、このイデオロギーはプロレタリア革命の国際主義の大義に対する裏切り以外の何ものでもなかったからである。レーニンは次のように書いた。「〈ナショナル・ボリシェヴィズム〉……の驚くべき馬鹿さ加減を否定するだけでは十分ではない。〈ナショナル・ボリシェヴィズム〉は、国際プロレタリアート革命の今の諸条件の下で、協商国と戦争するためにドイツ・ブルジョアジーとブロックを結べとまで主張した。ソヴィエト・ドイツ――ドイツ・ソヴィエト共和国が間もなく生まれるとして――としては、一定の期間ヴェルサイユ講和条約を承認し、それに従う義務があり、この義務を認めない戦術は根本的に誤りだということを理解しなければならない」と。(2)

ナショナル・ボリシェヴィズムの主張は、思想それ自体としては、公式にレーニンによって明確に否定された。しかしながら他方で、後述するように、「戦術」ないし「政策」レヴェルにおいてナショナル・ボリシェヴィズムが、レーニン自身をも含めてボリシェヴィキ指導者によって受け入れられたというのが実情であった。さもなければ、呱々の声をあげたばかりの新政権は生存することすらできなかったであろうからである。

さらに反ボリシェヴィキ陣営にも、ドイツで誕生したこの思想に強い関心を寄せたロシア知識人がいた。内戦期にコルチャク軍に身を投じてボリシェヴィキ政権と戦っていた亡命ロシア人、ニコライ・ヴァシリエヴィチ・ウストリャーロフ（一八九〇－一九三八）である。牢固として揺るぎないロシア愛国者で、「大国ロシアの再生」

を熱望していたウストリャーロフは、雪崩を打った白衛軍の敗北という冷厳な現実を目の当たりにして、今やボリシェヴィキ体制の変質とソヴィエト国家の発展に自らの願望を託すようになった。

ウストリャーロフが創始したロシアのナショナル・ボリシェヴィズム運動は、いわゆる「道標転換（Smena vekh）」運動として知られている。この運動は、一九〇五年の革命に際して生まれたブルジョア政党である立憲民主党（カデット）あるいは一〇月党（オクチャブリスト）に参画し、一九一七年の革命の結果成立したボリシェヴィキ政権に反旗を翻しながら、レーニンが自ら断行した新経済政策（ネップ）の導入、さらにはスターリン体制の確立とともに、ロシアにおけるナポレオンの登場を待望して、一転〝親ソ〟へと舵を切った亡命ロシア人たちの政治運動であった。[3]

ところで、こうした軌跡を描いた亡命ロシア人の思想運動や政治運動は道標転換運動に限らない。ロシアの歴史と国家発展の方位を東方アジアへと軌道修正を行い、ユーラシア国家像を提示した「ユーラシア主義（Evraziistvo）」運動[4]、またそもそもは王政復古を唱えながら、スターリンがボナパルティズムへの途を切り拓くことを期待してソヴィエト・ロシアとの和解を説いた「青年ロシア運動（Mladorossy）」を挙げることができるであろう。[5]これらの運動はいずれも「大国ロシアの再生」を追い求めていたという意味で少なからず共通点を有していた。しかし、他の二つの運動に先駆けて組織された道標転換運動は、異郷の地で祖国喪失に苦しみ、無力感に打ちのめされていた若い世代の亡命ロシア人たちに霊感を吹き込み、政治的な方向づけを施したという点で、特別な地位と役割を有していたといえよう。

本稿の目的は、政治活動家としてはカデット右派から出発し、確信的な反ボリシェヴィキ知識人であったニコライ・ウストリャーロフが、いかなる歴史的現実に向き合うことでソヴィエト共産主義イデオロギーとその体制との和解の途を選択するにいたったかを、とくに道標転換運動に焦点を当てて検証することにある。それはまた、

亡命ロシア知識人の眼に、ロシア革命からスターリン体制の成立にいたるソヴィエト体制とソヴィエト国家がいかなる像を結んだかを解明する作業でもある。

## 一、ニコライ・ウストリャーロフ

一九三八年、粛清の嵐が吹き荒れていたスターリン体制下のソ連で、亡命先のハルビンから祖国に帰還した一人のロシア知識人が処刑された。ハルビン学院で教鞭を取っていた彼、ニコライ・ウストリャーロフが一切の疑念と不信を拭い去ってソヴィエト体制との和解を果たし、モスクワの地を踏んだのは三年前の一九三五年のことであった。彼は、スターリンがその独裁権力を強固なものとしたソヴィエト国家のうちに大国ロシア再生の希望を見出していた。しかし、彼の運命は暗転する。自ら和解を決意し、復帰の夢を果たした祖国ソヴィエト・ロシアに裏切られ、彼は刑場の露と消えたのであった。

ウストリャーロフはモスクワ大学法学部に学び、一九一三年卒業、一九一六年から彼自身も私講師として憲法の講義を担当する傍ら、言論活動にも積極的に取り組んだ。彼は学生時代にカデットに入党し、一九一八年まで同党の地方指導者として活躍した。同年九月、いわゆる「赤色テロ」が始まると、逮捕を避けてシベリアに逃れた彼はペルミに移り住み、この地の大学で公法の私講師として教鞭を取った。

同年一二月末、アレクサンドル・コルチャーク提督（一八七四－一九二〇）が率いた白衛軍によってペルミが占領されると、ウストリャーロフはコルチャーク政府が置かれたオムスクに移り、行政府の要職に就いた。こうして内戦の間、彼は白衛軍の一員として反ボリシェヴィキ闘争に参加した。一九一九年オムスクが陥落し、翌二〇年一月コルチャク政権は崩壊する。ウストリャーロフは赤軍の探索を逃れて、ロシアの中心部から遠く離れた

極東の都市に住むことになる。彼が選んだのは、一九世紀末に東支鉄道建設の拠点としてロシア帝国によって築かれた満州のハルビンであった。彼はこの地で一九三四年まで、日本が設立した「ハルビン学院」で教授を務めた。一九三五年、スターリン体制下のソ連に帰国し、モスクワ運輸工科大学教授に就任し、地理経済学を講じた。しかし、一九三七年「反ソ活動」の嫌疑を受けて逮捕され、翌三八年不慮の死を遂げることになる。(6)

ウストリャーロフは、ピョートル・ストルーヴェ（一八七〇―一九四四）やニコライ・ベルジャーエフ（一八七四―一九四八）ら、いわゆる「道標派」知識人の思想的影響を直接受けて育った新世代に属する知識人であった。こうしたことは、彼が学生時代にストルーヴェを中心的指導者とするカデットに加わった事実にも現れている。しかし他面で、両者の間の世代の相違だけでなく、道標派知識人の多くが思想としてのマルクス主義と格闘した経験をもつ元マルクス主義者であった事実も軽視されてはならないであろう。ウストリャーロフにとって、マルクス主義も革命も、もはや思想の問題ではなく、政治的、歴史的現実そのものであった。そしてこの現実が彼を鍛えあげ、その思想形成を導いたのであった。こうしたことから窺えるのは、道標派知識人が彼に与えた影響は限られたものであったということである。「道標」の「転換」というテーマは、すでにこうした事実のうちに胚胎していたのである。

一九〇九年に上梓された論文集『道標（Vekhi）』は、ベルジャーエフ、ストルーヴェ、そしてセルゲイ・ブルガーコフ（一八七一―一九四四）といった当時のロシアの代表的な知識人たちが、一九〇五年の革命が自由主義や立憲民主主義の確立という課題において無惨な挫折に終わった現実を直視して、その根本的な原因を解明しようとした試みであった。彼らはマルクス主義批判を展開する一方、他方でロシア・インテリゲンツィヤの責任をも追及した。彼らによれば、ロシア・インテリゲンツィヤは真理よりもイデオロギーを重視したばかりか、抽象的な空理空論を弄ぶことに終始し、現実との繋がりを見失ってしまった結果、建設的で、責任ある行動を取り得

なかったのだ。[7]

ウストリャーロフら道標転換派の知識人たちは、反ボリシェヴィキ知識人が陥った袋小路からの脱出路を、道標派の警告に学ぶことで発見しようとした。ソヴィエト体制にひたすら呪詛の言葉を投げつけ、現実性を欠く幻想のロシアを夢見ながら、空疎な議論に時間を費やす亡命ロシア人たちに対して、彼らは歴史と現実に目を塞ぐことなく、直視せよと訴える。そしてウストリャーロフは、変質し発展しつつあるソヴィエト体制を受け入れ、ボリシェヴィキと協力することを通じてロシア再生のための戦いに参加するように呼び掛けたのであった。彼は同志の一人に次のように書き送った。「われわれは亡命を無意味なものにし、亡命移住者とソヴィエト政府とを和解させなければならないのだ」と。[8]

ところで、ウストリャーロフがソ連に帰国するまで極東のハルビンに居を定めていたのに対して、共に道標転換運動の創始に関わったクリュチニコフらはパリに住んでいた。最初の論文集の出版とそのタイトル『道標転換』のアイデアを提供したのはクリュチニコフであった。論文集が現れてからこの運動の拠点はパリ、次いでベルリンに置かれた。しかし、このグループの中心的指導者は終始一貫ハルビンのウストリャーロフあった。[9]

## 二、知識人と革命

一九一七年、二つの革命がロシアを襲った。皇帝ニコライ二世が帝冠を投げ出し、帝政の崩壊という事態に結果した二月革命が知識人の間に呼び覚ました民主主義的熱狂は、ウストリャーロフをも虜にした。カデット党員の彼は、もとよりマルクス主義とは一線を画して、自由主義と立憲民主主義の啓蒙宣伝活動に積極的に参加した。彼はモスクワの日刊紙『ロシアの朝（Utro Rossii）』にしばしば寄稿し、ブルジョア民主主義勢力への支持を表

明するとともに、モスクワの産業界とも緊密な関係を築いた。[10] この時点での彼は、紛れもなくブルジョア民主主義思想を信奉する右派知識人であった。

しかしながら、革命後の政治的、社会的混乱が激しさを増す一方、合従連衡を繰り返した臨時政府が時々刻々変化する状況に対応する能力をもたないことが人々の眼に明らかとなった。帝政崩壊後の権力の空白を埋めるべき憲法制定議会に寄せられた多くの人々の期待は、次第に失望と幻滅に取って代わられた。ボリシェヴィキが政治権力を奪取して後は、共産主義体制に対抗する勢力が結集する唯一の政治舞台は憲法制定議会であった。翌一九一八年一月、ボリシェヴィキ政権が強権を発動して選挙で選ばれたばかりの議会を解散した時、ブルジョア民主主義に対する期待と信頼は大きく損なわれる結果となった。

事態がボリシェヴィキの独裁権力の樹立に向かって急激な展開を見せる中で、元来スラブ主義的な心情の持ち主であったウストリャーロフは、次第に市民的自由と自己決定という民主主義の基本原理に疑念と不信を抱くようになった。彼には、ロシアが陥った危機からの唯一の脱出路は民主制ではなく、独裁制の確立であると思われたのである。[11]

それ故に、ウストリャーロフがボリシェヴィキ政権による民主主義や市民的自由の蹂躙にとくに驚かなかったことは何ら不思議ではない。むしろ彼に危惧の念を抱かせたのは、革命政権のインターナショナリズムのイデオロギーであり、反ロシア・ナショナリズムの傾向であった。

二月革命は当初、ドイツとの戦いでロシアに勝利をもたらすチャンスとなるという期待を膨らませた。ツァーリ政府はロシアの国際的威信を高めることはおろか、維持することすらできなかった。ウストリャーロフによれば、革命は何よりも先ず第一に「勝利をかち取ろうとする国家の意思的行為」[12]でなければならなかった。彼は、旧体制が崩壊した今、ロシア国民は挙げて戦争を祖国の勝利でもって終わらせるために全力を尽くすだろうこと

を信じた。

ボリシェヴィキ政権が選択したブレスト・リトフスクの休戦が、ウストリャーロフを失望させ、憤らせたことは想像に難くない。だがそれにもかかわらず、彼はレーニンをドイツのスパイとして告発した反ボリシェヴィキ派の批判には与しなかった。注目すべきは、この頃から彼の論調に親ボリシェヴィキ的な傾向が見出されることである。彼はしばしば革命を「真にロシア的な現象」と呼んだ。なぜなら、革命を勝利に導いたボリシェヴィキは、農民暴動の指導者エメリヤン・プガチョーフ（一七四〇―七五）と暴力的アナーキズムの思想家ミハイル・バクーニン（一八一四―七六）とが独特の形で一体化した革命家集団に他ならないからである。[13] なるほどボリシェヴィズムは、ロシア知識人（インテリゲンツィヤ）の知的所産ではある。しかしそれは、「国際主義」という皮相を除けば、依然として破壊への情熱を失っていないロシア人民（ナロード）に無意識のうちに受け入れられた。ボリシェヴィキ革命において、知識人と人民との間の知的、精神的断絶は克服された。両者は破壊へのロシア的情熱において出会い、結合したのである。[14]

ウストリャーロフは、一〇月革命そのものは極めて深刻な「病」であると認識していた。それは癒され、克服されなければならない。だが、その規模の雄大さと壮大さがロシア革命を世界史的な大事件たらしめているばかりでなく、ロシアの国民意識の特徴をなす思想的複合が革命それ自体のうちに凝縮されている点に留意する必要があると、彼はいう。彼によれば、世界革命に点火するというロシアの使命を高らかに謳いあげたボリシェヴィキの宣言において、西欧派のアレクサンドル・ゲルツェン（一八一二―七〇）とスラブ派のアレクセイ・ホミャコーフ（一八〇四―六〇）とが、そしてナロードニキ社会主義とマルクス主義とが相見え、結びついた。しかし革命において古いロシアの思想は試され、新しい思想に取って代わられるであろう。ロシア国民は自己検証の過程を経験しつつあるのであり、この過程を終えて初めて逞しく健康な新しい思想が創造されるのだ。[15]

ウストリャーロフの見解によれば、ロシアの壮大さ、偉大さ、そして強大さがその再生にとってとりわけ重要な意味をもっている。一九二一年夏、道標転換運動を始めるに際して、彼は自らのロシア大国主義的心情を誇らしげに次のように吐露したものである。「〈物理的に〉強力な国家だけが、偉大な文化を保持することができる。小国の性質は優雅で、誇り高く、〈英雄的〉ですらある可能性をもっている。しかし本質的に彼らは偉大であることはできないのだ。これは大きな、広範囲の、そして大規模な思想と行動とを必要とする。要するに〈ミケランジェロの画風〉である。ドイツ、ロシア、そしてイギリスの〈救世主主義思想〉というのはあり得る。しかし、われわれをしていわしめれば、セルビアとか、ルーマニアとか、ポルトガルの〈救世主主義思想〉といったものは、調子外れの音と同じように耳障りなものである」[16]と。道標転換運動は、ボリシェヴィズムを通して、まさにこうした強大な国家ロシアの再生を実現しようとする運動であった。

## 三、「道標転換」運動

一九二〇年初頭ロシア全土を巻き込んだ内戦が終息し、翌二一年三月には新経済政策が導入されると、それまで反革命闘争を展開していた亡命ロシア人たちの間に、ボリシェヴィキ体制の変質への期待が生まれるようになる。こうした願望が明確な形を取って現れたのが、一九二一年七月プラハで出版された論文集『道標転換(Cmena vekh)』であった。この論文集に寄稿したニコライ・ウストリャーロフ、モスクワ大学の元私講師で、コルチャク政府の外務大臣を務めたユーリー・クリュチニコフ(一八八六―一九八三)、弁護士で一〇月党の有力指導者であったアレクサンドル・ボブリシチェフ=プーシキン(一八七五―一九三八)、セルゲイ・ルキヤノフ(一八八八―一九三八)、ユーリー・ポテーヒン(一八八八―?)、そしてセルゲイ・チャホーチン(一八八三―一九

七四）らはいずれも、立憲民主党か、あるいは一〇月党の元党員であり、それまで白衛軍の陣営にあってボリシェヴィキ政権との戦いに明け暮れる日々を過ごしていた亡命知識人であった。彼らは同年にパリで同名の雑誌『道標転換』を刊行し、翌年ベルリンでクリュチニコフを編集者として日刊紙『前夜（Nakanune）』を発刊した。

道標転換派（Smenavexovtsy）と呼ばれた彼らが共通して抱いたのは「革命は進化しつつある」[17]という認識であり、ボリシェヴィキ政権が新しい形態で、そしてこれまでとは異なる社会的基盤の上にロシア国家を再建しつつあるが故に、彼らと和解し、協力すべきであるという信念であった。ウストリャーロフによれば、「ネップ、それはボリシェヴィズムの経済的ブレストであり、戦術ではなく、進化であり、内的変質」に他ならない[18]。「ロシア」共産主義としてのボリシェヴィズムは、今やロシア国家再生のための有効な手立てを準備しつつある。ロシア知識人は、ロシアの知的、文化的伝統に立つ革命の理想に準拠して祖国を改造することが可能となる武器、つまり「国家権力」という武器を掌中にしたことを認識しなければならない。帝政の衰退が革命という破局を惹起することになったロシアは、「ソヴィエト国家」の誕生と発展によって大国として復活するであろう。彼は続けて次のように書く。「ソヴィエト権力の利害は、宿命的にロシア国家の利害と一致している。……この論理的発展は、ボリシェヴィキをしてジャコバン主義からナポレオン主義へと導くであろう。……革命権力だけが、偉大なロシア国家とロシアの国際的威信を回復することができるのだ」[19]と。

道標転換派知識人にとって、一九二〇年を境として革命ロシアに現れた一連の事態は「ロシア」がボリシェヴィキ革命を「貪り食い」始め、革命が「テルミドールの反動」に屈伏していく兆候であった[20]。革命政権をめぐる状況の変化が「偉大な日和見主義者」、ウラジーミル・レーニン（一八七〇―一九二四）をして革命重視から、現実的な国家的利益の重視へと路線の転換を促したとすれば[21]、ウストリャーロフら反ボリシェヴィキ派知識人が態度を変えて、ロシアの利益を第一義的なものとは考えない西欧列強との連合を訴える白衛軍ではなくて、変質し

つつあると彼らが信じたボリシェヴィキ政権を支持する方向に転じたことは必ずしも不自然ではなかった。こうして道標転換派は、ロシア知識人に対して「ボリシェヴィキ革命への責任を引き受けるだけでなく、ロシア愛国者としてそれを支持しなければならない」[22]と公然と訴えたのである。

ところですでに触れたように、こうした思想的転換は突然起こったわけではなかった。親ボリシェヴィズム的論調はすでに一〇月革命直後に現れていたし、また一九二〇年、ハルビンを亡命の地に選んだウストリャーロフが当地の日刊紙に発表した論文でも同様の考えが述べられていた。彼は、白衛軍が内戦で一敗地に塗れただけでなく、外国の支援を求めたことで、ロシア愛国主義勢力の中核であるという自らの主張の正統性を失ったと指摘する[23]。白衛軍の側で戦った亡命ロシア人にとっても、今や最重要な課題は、ボリシェヴィキ政権の打倒ではなく、「強大で、統一的な国家としてのロシアの再建」でなければならない[24]。反ボリシェヴィズムの企てはいかなるものであれ、「反ロシア的な企て」である。そして彼はこう書く。「革命権力が、この権力だけが、国際的威信をそなえた強国としてのロシアを再生させることができるが故に、ロシア文化の名においてわれわれが負うべき義務は、その政治的権威を容認することである」[25]と。

道標転換派のこうした主張が直ちに、亡命ロシア人社会に受け入れられたわけではなかった。もっともニコライ・ベルジャーエフや、すぐれた歴史家であり、また二月革命後の臨時政府で外務大臣を務めたパーヴェル・ミリュコーフ（一八五九―一九四三）、さらには一時全ウクライナを支配下に置いた白衛軍司令官アントン・デニーキン（一八七二―一九四七）など、道標転換派にある程度の好意を示した有力な知識人や軍人がいたことも確かである。ミリュコーフはロシアの国家的利益とソ連のそれとが内容的に一致することを認めた。デニーキン将軍は、ボリシェヴィキ政権を崩壊に導くために外国の勢力と手を結ぶことに反対した。彼によれば、ソ連の打倒は飽くまでもロシア人自身の事業でなければならなかった[26]。しかし、多くの亡命ロシア人の反応は沈黙か、あるい

は批判であった。一九二六年に開催された在外ロシア人大会でも、道標転換運動に対する評価は賛否両論で、意見の一致に達することはなかった。ボリシェヴィキ政権との妥協という主張を鋭く批判していたロシア自由主義の指導者ピョートル・ストルーヴェに答えて、ウストリャーロフはこう反論した。「ボリシェヴィズムは急進的インテリゲンツィヤの伝統に立つロシアの運動である。現在のロシアの支配者としてボリシェヴィキを受け入れることは、マルクス主義者となることでも、政治テロの擁護者となることでもなく、まさに国家原理の偉大な創造的価値を認め、そして国家とともに活動することなのだ」[27]と。

他方ボリシェヴィキ政権の側には、道標転換派に注目する理由が存在した。長く続いた戦争と革命によって疲弊し、壊滅した経済の再建を図るために、ソヴィエト政府は経済の専門家を必要としていたし、またヨーロッパの先進的な資本主義諸国との通商関係を求めてもいた。しかし、国際的な通商問題の専門家はいなかったし、人脈もなかった。一九二二年、ジェノヴァで開催された経済会議にソヴィエト代表団の法律顧問として道標転換派指導者のクリュチニコフが出席したのも[28]、当時のソヴィエト政権が置かれていた苦境を端的に物語るものであろう。後述するように、二〇年代を通じて軍事専門家をはじめとしてさまざまな種類の専門家が、亡命生活に終止符を打って〝祖国〟ソ連に帰還した。彼らの多くは道標転換派の影響を受けていた人たちであったのである。

## 四、ソヴィエト国家との和解

ウストリャーロフによれば、ボリシェヴィキは新たに誕生したソヴィエト＝ロシア国家の統一と結束を固める「セメント」の役割を果たすべきものであった。彼は共産主義（communism）とボリシェヴィズム（bolshevism）とを峻別する[29]。なぜなら、共産主義がナショナリズムを否定し、インターナショナリズムを標榜する

のに対して、ボリシェヴィズムは大国ロシアの再生に導くべきロシア・ナショナリズムのイデオロギーでもあるからである。

ウストリャーロフは、ボリシェヴィズムに導かれたロシア革命に対するロシア自身の責任とそのロシア的性格を強調して、次のように書いている。「われわれも、人民も、今日の危機に対する、その暗い……側面に対する直接の責任を逃れることはできない。それはわれわれの責任、真にロシア人の責任であり、われわれの心理とわれわれの過去に根ざしている。……たとえ数字の上でロシア革命家の九〇％が非ロシア人であり、しかもその殆どがユダヤ人であることが証明されようとも、このことが運動の純粋にロシア的な性格を否定するわけではない。……ロシア革命を支配しているのは非ロシア人革命家たちではなく、非ロシア人革命家たちを支配しているのがロシア革命なのだ」[30]と。

ウストリャーロフにとって、レーニンが断行したネップは自らの主張と予見を裏付けるものであった。ネップは、急進的な革命政権がより穏健な体制に変質する転換点以外の何ものでもなかった。ロシア革命とその後の事態の展開は、ロシア社会をその根底から揺り動かし、新しい政治的、経済的階層を社会の前面に登場させた。ネップは中産階級に果たすべき役割を準備したのであり、それ故に国内外のロシア知識人は挙げてボリシェヴィキ政権を支持し、協力すべきである。「ボリシェヴィキにおいて、ボリシェヴィズムを通して、ロシアのインテリゲンツィヤは人民に対する自らの歴史的背信と、国家に対する自らの背信を克服し」なければならないのだ[31]。

大国ロシアの復活をひたすら願う愛国者であったウストリャーロフが、共産主義思想そのものを受け入れたわけではなかったことは論を俟たない。彼は自らが信じる究極の目標は不変であり、ボリシェヴィズムそれ自体も克服されなければならないと繰り返し強調した。しかしながら、軍事力でボリシェヴィキ政権を打ち負かすことはもはや不可能である。他方で、コルチャク政府崩壊の最後の日まで白衛軍による反革命運動を支持していたウ

ストリャーロフの眼にも、すでに一九二〇年の段階で白衛軍の運動は破綻していると映じていた。彼によれば、白衛軍の惨めな敗北は、歴史の歩みに逆らうその反動的性格によってもたらされたのではなかった。ボリシェヴィキ政権の政治手法は白衛軍のそれよりも遙かに反動的であると、彼は指摘する。むしろ逆にコルチャク政府は民主化を急ぎ過ぎ、断固とした政治的決断力を失ったために敗北を喫し、崩壊したのだ。(32)

白衛軍が相次いで敗北し、結局ロシアがボリシェヴィズムを克服し得なかった根本的な原因は、民主主義の誘惑に抗しきれなかったことに加えて、反ボリシェヴィキ運動が外国の諸勢力と緊密に結びついたことにもある。その結果、孤立して白衛軍と戦ったボリシェヴィキ政権に図らずも一種の「国家主義的オーラ」を与えることになってしまった。逆説的に大国ロシアを復活させ、国際舞台でロシアの威信を高めるという、本来白衛軍運動が掲げていた神聖な目標を達成しつつあるのはボリシェヴィキ政権なのだ。(33)

しかしそれにもかかわらず、ロシアはボリシェヴィキ革命を乗り越えなければならない。ウストリャーロフにとって、道標転換派の思想と運動は、ボリシェヴィキ体制内部の奥深くに入り込んで内側から革命の本質を変えることを狙う「トロイの馬」に他ならなかった。結局のところ「ソヴィエト権力はロシア人の国家を建設している」のであり、だからこそこの建設事業を内から支え、それに積極的に参画することが必要である。(34)

一九二五年夏、ウストリャーロフは『革命の旗印の下に（Pod znakom revolyutsii）』と題する論文集を刊行した。ソヴィエト体制を新しい「シーザー主義」と呼び、ネップを「テルミドール」と論じた。(35) この著作は、ソヴィエト指導者の間に激しい議論を呼び起こした。(36) ボリシェヴィキ党が路線を逸脱してネップが産み落とした「新ブルジョアジー」に、そしてとりわけ自営農民に譲歩し過ぎていると考えた左派指導者グリゴリー・ジノヴィエフ（一八八三―一九三六）は、党が政策変更を行わなければウストリャーロフの予言が成就するだろうと警告した。一九二六年、ジノヴィエフは中央統制委員会の席上で次のように述べた。「ウストリャーロフの――そうだそれ

にミリュコーフの――大使たちがモスクワにいる。彼らは事実上財政人民委員会、農業人民委員会、国家計画委員会の仕事を指導している。彼らはわれわれやカリーニン以上に指導している。言葉のうえでは、これらの〈道標転換〉派の教授たちは、手間稼ぎをしているだけだが、事実のうえでは彼らが決定しているのである」[37]と。ニコライ・ブハーリン（一八八八―一九三八）は、ウストリャーロフの予言が事実の誤った解釈から生まれた結論であり、「新しい専制」を夢見ているに過ぎないと非難した[38]。

しかしながら、ボリシェヴィキ政権の側に、道標転換派の呼び掛けに呼応して亡命先からソ連に帰国する人々を歓迎せざるを得ない事情が存在した。レーニンも「プロレタリア的なものから遠く隔たっている人々が、今ボリシェヴィキの政治的成功に引きつけられている」[39]ことに複雑な感情を抱いていた。彼は「道標転換派がソヴィエト権力を支持することに賛成するのは、この権力が普通のブルジョア権力に転落していく」過程にあると認識しているからであることに深刻な懸念を表明しながら、半面彼らが「新経済政策の参加者である数千、数万のあらゆるブルジョアやソヴィエト職員の気分をいい表している」[40]事実を認めなければならなかった。実際、ボリシェヴィキ政権は自らの存立を確固たるものにするためにも、何にも増して有能な軍指揮官、さらには行政や経営管理の専門家（Spetsy）の参加と協力を必要としていた。ミハイル・アグルスキーは、こうした専門家に対する道標転換派の影響が極めて広範であった事実を指摘している。知識人、軍人、種々の専門家、さらにはロシア正教会内の革新派を名乗った聖職者グループ『生ける教会』にいたるまで、あらゆる領域に及んだという[41]。ソ連の公式資料によれば、一九二〇年代に一八一、四三二名の亡命ロシア人が祖国に帰還した[42]。

その後のスターリン体制の確立と、ネップ時代の終焉という新たな事態の進展は、ウストリャーロフに少なからぬ衝撃を与えた。道標転換運動が拠って立つ前提条件が失われつつあったからである。一九二七年一二月に開催された第一五回党大会は、工業化を押し進める第一次五ヵ年計画の導入と、農業集団化の推進を決定した。ウ

ストリャーロフはネップの継続を主張したブハーリンの右派グループに一縷の希望を託さざるを得なかった。しかし一九二九年一一月、右派が党の主要な敵と宣告されると、彼はいよいよ窮地に陥った。ブハーリンは急速にその政治的影響力を失い、一九三八年に処刑された。

しかし、ウストリャーロフのロシア愛国主義と大国主義的信念は、ソ連で起きつつあった事態をも受け入れさせ、それとの和解を可能にするほど強かったといわなければならない。なるほど彼も、スターリンの恐怖政治や集団化政策に伴う血なまぐさいテロに目を塞いだわけではなかった。だが、これを理由としてスターリン・ロシアは非難されるべきではない。ウストリャーロフによれば、スターリンが手がけつつある事業は、現在が「未来のために犠牲にされた」ピョートル大帝時代のそれにも匹敵するものなのだ。(43)

一九三四年一月から二月にかけて開かれた「勝利者の大会」と呼ばれた第一七回党大会は、ウストリャーロフの最後の疑念と不信を払拭した。この大会は、社会主義経済の基礎が築かれたことが宣言される一方、スターリンがソヴィエト国民に公然とロシア愛国主義を訴えかけたという点で、ソヴィエト史においても特別な地位を占めている。(44) ウストリャーロフは大会に祝福のメッセージを送って次のように書いた。「それがわれわれの祖国であるから、そしてその世界的規模の大義と周知の偉業の故に、今やわれわれはいうことができるだろう。そうなのだ。偉大な計画が実現され、祖国の奇蹟的な改造が血となり、肉となりつつあると。疑いや恐怖は拭い去られた。ソヴィエト国土に住まう国民の上に、真に新しい、そして栄光に満ちた生活の日が明けつつある」と。(45)

一九三四年秋、ウストリャーロフは自由に発言する最後の機会を利用して、論文集『われらの時代（Nashe Vremia）』を公刊した。この論文集において、彼はソ連における無階級社会の成立とソヴィエト体制の世界史的使命といったテーマに特別な関心を注ぎながら、スターリン体制下のソ連を「ソヴィエト愛国主義」の視点から論じている。(46) 彼には、道標転換派が唱えたナショナル・ボリシェヴィズムの主張はソ連の変化と発展によってよ

り一層明確に実証されたように思われたのである。

ソ連の路線と政策を容認する論文集の公刊は、ハルビンに住むウストリャーロフを市当局とのトラブルに巻き込む結果となった。折しもソ連と日本との間で東支鉄道の帰属をめぐって交渉が行われていた。日本は一九三二年満州帝国を建設しており、東支鉄道が日本の支配下に置かれるようになるのは時間の問題であった。こうした状況下でウストリャーロフは祖国に帰還する決意を固めたのであった。

一九三五年五月、ウストリャーロフとその家族はモスクワに向かって出発した。ソ連で何が彼を待ち受けているのか全く不明であった。彼は、新しいソヴィエト国家に年老いた旧世代のロシア知識人に与えられる場所など存在しないことをよく理解していた。彼は次のように書いていた。「すべて革命前の世代は破滅しないでいるためには、ソヴィエトの大鍋で調理され、コムソモールの若者たちに奉仕し、革命的現実の力に身を任さなければならない」[47]と。一九三四年夏、友人に書き送った手紙は当時の彼の心境をよく表している。「もし国家が私に〈沈黙を守れ……あるいはもっとよいのは、私がお前に命ずることを書き記すことだ〉といえば、その時には私は従って沈黙を守るだろう。恐らくは力があるかぎり、私は彼らか私に命ずることを書くように努めるだろう」[48]と。

モスクワに帰ってから一九三七年四月まで、彼は『イズヴェスチヤ』紙に三本の論文を発表する機会を与えられた[49]。そのうちの一つはスターリン憲法に関する論文で、彼は新憲法が「世界史の新しい、未曾有の段階」の始まりを画したと論じた。彼によれば、スターリン憲法の制定は、「自由と権威とを弁証法的な統一において結びつける」ことによって民主主義の問題を解決したばかりでなく、人間による人間の搾取に、そして民族による民族の搾取にも終止符を打った。ソ連は今や「自由な諸民族の自由な同盟」、すべての人民の「共通の祖国」となり、ナショナリズムとインターナショナリズムとの対立も解消された。ブルジョア世界はますます衰退する一方、

プーシキンとゲルツェンの祖国は長い闘病生活を終えて甦り、世界に「真の人間主義」の実現への道を切り拓いたのである。彼はこのようにスターリン憲法を歓迎し、手放しの礼讃の言葉を書き綴った。(50)

ウストリャーロフは、彼が和解し、大国ロシアの再生の希望を託したソヴィエト国家のために誠心誠意奉仕したといわなければならないであろう。しかし、無慈悲なスターリンの粛清の刃は彼をも見逃さなかった。ウストリャーロフの祖国への帰還は不慮の死で幕を閉じたのである。

## むすびにかえて

ニコライ・ウストリャーロフの矛盾に満ち、悲劇に終わった生涯は、戦争と革命の世紀にあって思想と現実との間の相剋に苦しみ、祖国ロシアにおけるスターリン体制の成立という歴史的現実に翻弄されたロシア知識人の姿を映し出している。

ウストリャーロフは一方において、スラブ主義と西欧主義という二つのナショナリズム思想が紡ぎ出した一九世紀的なロシアの知的世界の残照を浴びて育った知識人であった。しかし他方で彼は、ひたすら絶対的な観念の世界に生きようとした従来のロシア知識人とは違って、政治や国家といった現実的で、相対的な価値世界に旺盛な関心を寄せた新しいタイプの知識人でもあった。

ウストリャーロフの政治的リアリズムは、その根底において、彼の熱烈な祖国愛とロシア大国主義の強固な信念と結びついていた。彼自身がかつて打倒を目指したボリシェヴィキ政権と和解する途を選択したのも、そしてまた同胞の亡命ロシア人に対して幻想を棄てて現実を受け入れ、祖国ロシアで目覚ましい発展を遂げつつあったソヴィエト国家に協力するように呼び掛けたのも、まさにこうした心情と信念からのことであった。

しかしながら、彼の期待は実を結ばなかった。彼はボリシェヴィキ政権の本質を正しく理解していなかったし、また彼が期待したようにソヴィエト体制が変質したわけでもなかった。スターリンは、断じてロシア・ナショナリズムの偉大な指導者ではなかった。「大国ロシアの再生」という夢を託したソヴィエト国家は、決してウストリャーロフが思い描いたようなナポレオンやシーザーの国家とはならなかった。彼自身も予見していたように、スターリンのロシアでは彼は自ら占めるべき場所をもたず、排除されるべき存在であった。結局、彼の政治的リアリズムも幻想でしかなかったのである。

しかし他方で、ウストリャーロフのナショナル・ボリシェヴィズムが、ソヴィエト政権内部で一定の支持を獲得し、その時々の内外政治に影響を及ぼしていた事実は注目に値する。それは、ウストリャーロフらの呼び掛けに応えてソ連の現実と和解し、祖国への帰還を果たした旧帝国軍将校やさまざまな専門家に支持されただけではなかった。それはしばしば、ソ連の支配機構を構成していた特定の政治勢力が依拠した体制イデオロギーとして、クレムリンの政治力学とも結びつき、ソヴィエト時代の政治的潮流を形づくっていたのであった。[51]

ウストリャーロフの「道標転換」の思想と運動は、もとより体系的な理論を構築したわけでも、また組織的な政治運動を展開したのでもなかった。それは厳密な意味での思想というよりは、レーニンが喝破したように、むしろ時代の雰囲気を伝える気分と呼ぶべきものであった。そしてそうであるからこそ、親共と反共とを問わず、少なからぬロシア知識人を魅了する力を有していたといえよう。

道標転換運動は結局ソヴィエト体制内に吸収されてしまい、それ自体としては存続することはできなかった。しかしこの運動は、確かに一定期間、祖国を喪失したロシア愛国者と国家権力の肉体を纏ったボリシェヴィキとを結びつける共鳴板の役割を果たしたのである。

（1）「ナショナル・ボリシェヴィキ」と呼ばれたドイツのナショナリストたちは、対外関係ではソヴィエト・ロシアと同盟を結び、共同で第一次世界大戦の勝利者たちに戦争を仕掛ける考えであった。K．ゾントハイマー『ワイマール共和国の政治思想――ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想』河島・脇訳、ミネルヴァ書房、一九七六年、一二六―一二九頁、およびフランツ・ボルケナウ『世界共産党史』佐野・鈴木訳、合同出版、一九六七年、一六八―一六九頁を参照。

（2）『レーニン全集』第三一巻、大月書店、一九五九年、六二―六三頁。

（3）拙著『ロシア・ナショナリズムの政治文化――「双頭の鷲」とイコン』、創文社、二〇〇〇年、九五―一〇七頁を参照。

（4）ユーラシア主義については、拙著、前掲書、五一―九〇頁を参照。

（5）青年ロシア運動については、拙稿「アレクサンドル・カゼム＝ベクと青年ロシア運動」（一）（二）『産大法学』（京都産業大学法学会、二〇〇二年二月、二〇〇三年三月）、二八―四七頁および六八―九二頁を参照。

（6）ニコライ・ウストリャーロフの生涯については、Hilde Hardeman, *Coming to Terms with the Soviet Regime: The "Changing Signposts" Movement among Russian Émigrés in the Early 1920s* (Northern Illinois Univ. Press, 1994), pp. 29 – 57. および Russkaya Filosofiya: Slovari, pod red. M. N. Maslina (Moscow, 1995), pp. 529-530. を参照。

（7）論文集『道標』については、ブルガコフ、ストルーヴェ他『道標　ロシア・インテリゲンチャ批判論集』小西善次訳、現代思潮社、一九七〇年、五―二七六頁を参照。

（8）Ustrialov to Potekhin, Harbin, Feb. 14, 1922, cited in Robert C. Williams, *Culture in Exile; Russian Émigrés in Germany, 1881-1941* (Cornell Univ. Press, 1972), p. 266.

（9）R. Williams, *Ibid.*

（10）H. Hardeman, *op. cit.*, p. 31.

（11）*Ibid.*

（12）Ustrialov, *Revoliutsiia i voina* (Moscow, 1917), p. 7.

(13) Ustrialov, "Russkii bunt", *Utro Rossii*, 26, November 1917.
(14) *Ibid*.
(15) Ustrialov, "V Rozhestvenskuiu noch'", *Utro Rossii*, 24, December 1917.
(16) Ustrialov, "Patriotica", Smena Vekh – Sbornik Statei: Yu. V. Kliuchnikova, N. V. Ustrialova, A. V. Bobrishchev-Pushkina, S. S. Chakhotina i Yu. N. Potekhina (Prague, 1921), pp. 57-58.
(17) *Ibid*., p. 68.
(18) Ustrialov, "Evoliutsiia i taktika", *Smena Vekh* (Paris), January, 21, 1922.
(19) Ustrialov, "Patriotica", p. 57.
(20) *Ibid*., p. 68.
(21) *Ibid*., p. 62.
(22) Bobrishchev-Pushkin, "Novaia vera", *Smena Vekh* (Prague, 1921), p. 135.
(23) Ustrialov, *V vor'be za Rossiiu* (Harbin, 1920), p. 5.
(24) *Ibid*., p. 17.
(25) *Ibid*., p. 55.
(26) Mikhail Agursky, "U istokov natsional-bol'shevizma", *Minuvshee: Istorichskii al'manakh*, no. 4 (Paris, 1987), pp. 157-158.
(27) *Smena Vekh*, November, 12, 1921, p. 4.
(28) R. Williams, *op. cit*., p. 267.
(29) Greb Struve, *Russkaia literatura vizgnanii* (New York, 1956), p. 32.
(30) Ustrialov, "Patriotica", p. 54.
(31) Ustrialov, *Pod Znakom Revoliutsii* (Harbin, 1927), pp. 257-258.
(32) Ustrialov, *V bol'be za Rossiiu*, p. 4-5.
(33) *Ibid*., p. 5.

(34) Ustrialov, “Patriotica”, p. 57.
(35) Ustrialov, *Pod znakom revoliutsii*, p. V.
(36) この議論については、M. Agursky, *The Third Rome: National Bolshevism in the USSR* (Westview Press, 1987), pp. 310 − 313. を参照。
(37) ロイ・ア・メドヴェーデフ『共産主義とは何か』上、石堂清倫訳、三一書房、一九七三年、一〇三－一〇四頁。
(38) M. Agursky, *op. cit.*
(39) 『レーニン全集』第三三巻、一九五九年、二九一頁。
(40) 前掲書、二九四頁。
(41) M. Agursky, *Ideologiia Natsional-Bol'shevizma* (Paris, 1980), p. 62. を参照。
(42) A. I. Doronchenkov, *Emigratsiia 〈Pervoi Volny〉 o Natsional'nykh Problemakh i Stud'be Rossii* (S. - Peterburg, 2001), p. 72.
(43) Ustrialov, *Na novom etape* (Shanghai, 1930), p. 14.
(44) 拙著、前掲書、一〇七－一一一頁を参照。
(45) Ustrialov, *Nashe vremia* (Shanghai, 1934), pp. 10-11.
(46) *Ibid.*, p. 21, pp. 26-27.
(47) *Ibid.*, pp. 131-132.
(48) Ustrialov to G. N. Dikii, 10 August 1934. See H. Hardeman, *op. cit.*, p. 56.
(49) 後述のスターリン憲法に関するもの以外の論文は次の通りである。一つは、プーシキン没後百年に寄せて書かれた論文 “Genii vekov” で、一九三七年二月一〇日に、いま一つはゲルツェン生誕一二五周年を記念して寄せられた論文 “Revoliutsioner-demokrat” で一九三七年四月六日に掲載された。
(50) Ustrialov, “Samopoznanie sotsializma”, *Izvestiia*, 18 December 1936.
(51) ナショナル・ボリシェヴィズムとソヴィエト政治との関わりについては、拙著、前掲書、九一－一二三頁を参照。